

黄のなき所もあり、硫黄のある所、温泉のなき所もあり、又いづくにても、海底の泥おほくは硫黄の臭氣をなす、温泉の滓なりとはいわれぬことを知るべし、略^{○中}

扱温泉のあまり熱きはよろしからず、又ぬるきはもとよりよろしからず、たゞ温和和煦なるをよしとす、香川太冲の説に、温泉は極熱のものをよしとす、極熱の熱勢、人の元氣を助け、元氣を滾動して、沈痾を起し、癰瘡を發すといへるは、笑ふべきの甚しきなり、元氣を助け、元氣を滾動すといへる字を下す事の笑ふべきのみならず、いまだかつて元氣の字義を考らざればなり、考かし元氣の論は、あながちに此書の主とする所にあらざる故に、その説のつまびらかなることはここに略す、温泉の能毒のわかるゝは、あつきとぬるきとによることにあらず、湯筋の差別によることなり、故に極熱の湯にも寒冷の性をそなへし、温泉あるべし、煎湯は熱湯にても、石膏の煎湯は寒性なるがごとし、又さまで極熱にてなく、其外の物にそます、たゞ純陽硫黄の氣ばかりを土中にて觸そゝぎて出來たる温泉ならば、その性温にしてよろしかるべし、故に温泉をゑらぶは、たゞ異氣に染むかそまぬかをとくと吟味し、自然天然うぶのまゝなる水筋の湯、硫黄の氣ばかりにふれそゝぎて出來る湯のあつからずぬるからず、身にふれて、温和和煦、既に浴して後、腹藏肌膚表裏内外、煦々温暖の氣やゝ、考ばしやまざる湯を、極上々の良湯とおもふべきなり、筑前の貝原篤信も、熱湯には浴すべからず、温なるをよしとすといへり、此ことはよしとすべし、

〔皇國名醫傳後編中〕山村通庵略^{○中}

重高通稱右一郎號通庵伊勢松阪人、重高以灼艾一門師說已備、己更欲試温泉之効、遍歷諸州、親驗其氣味、主能、既曰、但馬城崎、上野草津、其功相敵、均爲天下第一湯、但路程悠遠、或有難往者、於是抄意製湯、方用潮水五斗、硫黄六百錢、糠一斗、囊盛、先以潮水二斗煎糠、以糠赤色爲度、去滓、內硫黄、浴日三、漸內潮水、冬月旬餘一改、夏月四五日傾去上水、更加新潮、用硫黄糠本量之半、無潮水則以鹽五升和水、